

インドネシアのパダンの住宅再建

山崎義人(自然・環境マネジメント研究部)

ここ3年ほど9月にインドネシアのスマトラ島西部に調査に出掛けている。2009年9月にインドネシア・スマトラ島西部パダン沖でM7.6の地震が発生し山間部を中心に大きな被害が

出た。22万人の死者を出した津波で記憶に残る2004年12月のパ ندا・アチエ沖地震M9.1とは、別物である。



写真1: ジャワ島のコアハウス

写真2: スマトラ島のコアハウス1

首都大学東京の市古太郎准教授から声をかけてもらい調査研究に参加し大きな被害を受けたパダン周辺の山間部に通うことになった。神戸大学在籍時のジャワ島中部地震からの再建についての研究成果に氏が関心を示してくれたからだ。スマトラ島西部地震での住宅再建はコアハウスという住宅をあえて被災地の屋敷地に供給し、その後生活再建の進み具合に合わせて被災者自らが住宅を少しずつ拡張していくものであった。これは2006年5月のジャワ島中部地震M6.3においてガジャマダ大学のイカボトラ准教授らが試みた方法をインドネシアのNGOが普及版として展開したものであった。そのため、私が研究チームに参加するのが、コアハウスの被災地での配置等を比較検討する上で都合がよかったのだろう。

詳細は参考文献に譲るが、ジャワ島のものと異なりスマトラ島で供給されたコアハウスは風呂トイレが建物背面に予めつ

ている。このことで炊事場や資材置き場との関係からコアハウスが敷地全体の奥に配置される。続いて始まる生活のための部屋の拡張スペースは敷地手前に自然に確保できる。ジャワ島のコアハウスのように敷地手前にコアハウスを置き奥へと拡張していくよりも、建物の配置として被災後の生活再建を順次進めていくには有用であると考えられた。東南アジアの農山漁村の被災地においてレンガ造の住居が被災し、現地再建で復興を行う場合、スマトラ島で供給されたコアハウスの配置は効果的な方法のひとつであろう。

東日本大震災後の復興をはじめ、わが国では現地再建を支援する枠組みが弱い。仮設住宅は被災地とは別のところに建てられることが多く、コミュニティの構成員をシャッフルしてしまい問題が多いと思っている。



写真3: スマトラ島のコアハウス2

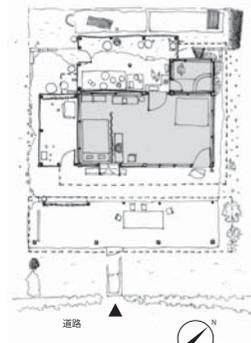


図1: 写真3の実測結果(原図S:1/100)

【参考文献】
山崎義人、市古太郎、長谷川庄司、中林一樹「空間的な利用状況から見るコアハウスの有用性 -2009年スマトラ西部地震被災地であるParlaman 県LimaKatoTimur 郡Talam 集落を事例として-」日本建築学会技術報告集(採用決定)

ひとはく生物多様性交流事業

八尾滋樹(生涯学習課 主任指導主事)

はじめての企画「ひとはく生物多様性交流事業 Borneo+One in たんば」が生まれたのは逆転の発想「行けないなら、来てもらえばいい」でした。ラハダ・トゥ サイエンススクール(以下LDSS)から4名の生徒と先生を招いて、日本の小学校5年生から高校1年生まで17名とともに、丹波市青垣町の丹波少年自然の家を拠点に3泊4日の自然体験学習を実施しました。

フィールドこそボルネオ島のダヌムバレーやレインフォレストとは違うものの、アクティビティそのものは、ジャングルで実施する内容とかなり近く、水生昆虫の観察や動物・植物観察なども取り入れました。今回は次年度のボルネオジャングル体験スクールの事前学習として位置づけており、熱帯雨林の生物多様性と温帯の生物多様性との相違点や類似点について、河合雅雄名誉館長、中瀬勲館長はじめ、多くの研究員らとともに体験をとおして学びました。また、県立コウノトリの郷公園やコウノトリ文化館、玄武洞公園、NPO法人日本ハンザキ研究所、ちーたん

の館、青垣いきものふれあいの里などの、県内市内の施設を訪れ、より専門的な学習も重ねることができました。

今回招致したLDSSの生徒たちは全員ムスリムでした。ちょうどラマダンと重なっており、日の出から日没までは一切飲み食いしない断食の習慣を知ることができました。欧米文化とは異なるイスラムの文化と交流できたことは、大変貴重な経験といえるでしょう。また、LDSSの生徒たちだけの特別なプログラムとして、ひとはくの館内展示見学や収蔵庫見学、そして兵庫県教育長表敬訪問などの公式行事も、多様性交流事業の日程の前に行われました。

大きな事故や病気もなく、滞りなく事業が遂行できましたのも関係の皆様方の協力があればこそです。この場をお借りしてお世話になった方々にお礼を申し上げますとともに、助成いただいた(財)日本児童教育振興財団さまにも感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

